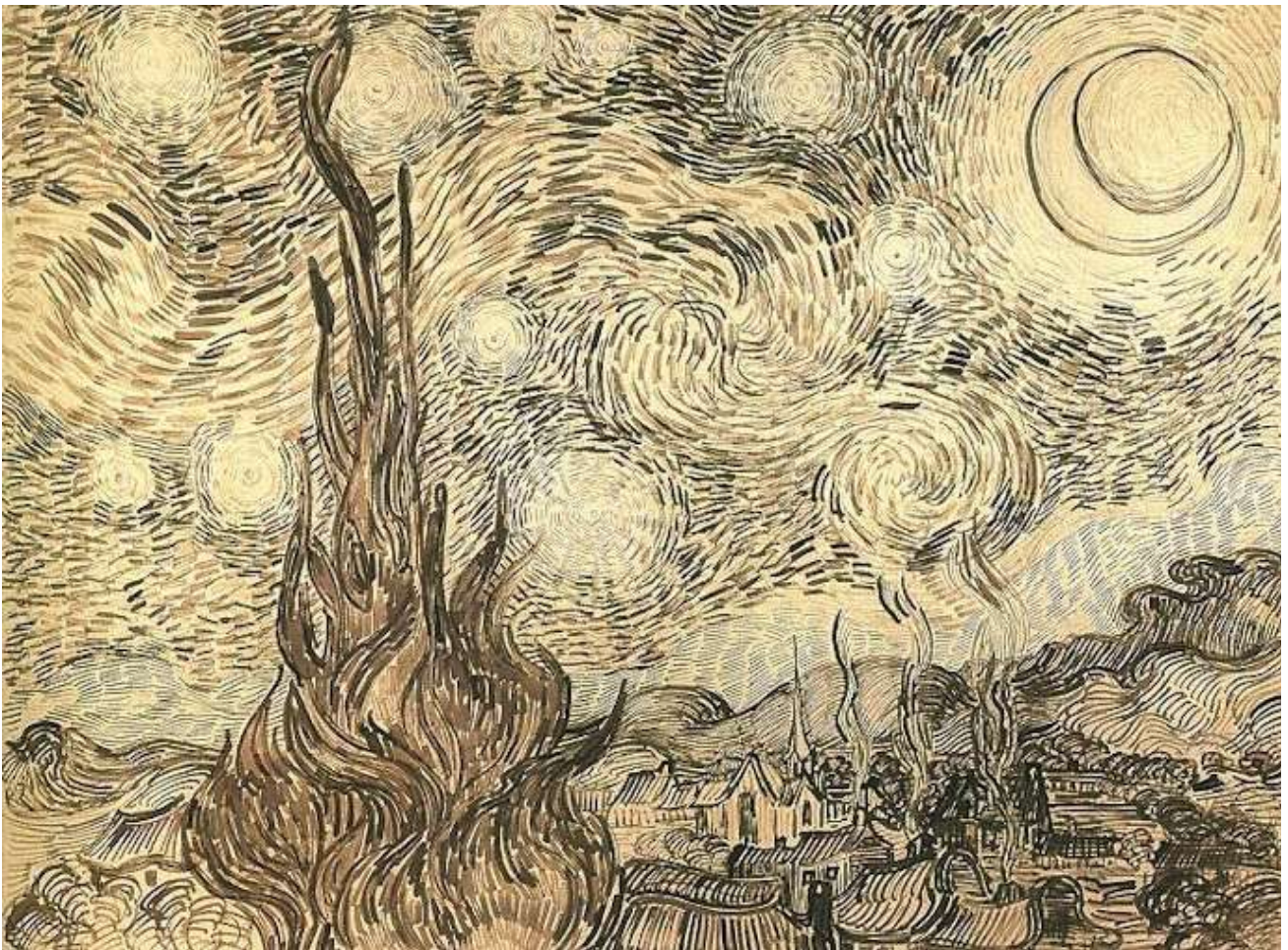

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 95

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1881. 新たな決意
- 1882. オーストリアの片田舎オーベルンドルフでの記憶
- 1883. 意識的な鍛錬とゆっくりと眺めることの効用
- 1884. 目覚め: 芸術を通じた人間発達と教育の探究
- 1885. UFO目撃
- 1886. 世界の始動
- 1887. 人生最後の瞬間の自己との邂逅
- 1888. アイデアの豊穡な多面性
- 1889. 高齢者の美的認識世界への関心
- 1890. 今動き出す新たな研究
- 1891. 充実感と幸福感への一体化
- 1892. ゆとりを持った研究スケジュール
- 1893. 来年の研究に向けての下調べ
- 1894. 対位法の学習
- 1895. 仮眠中の不思議な体験
- 1896. 行き詰まり
- 1897. 衰える日本語の筆記力
- 1898. いつか本格的に作曲を
- 1899. 父からのメール: 「人生から何を問われているか？」
- 1900. 変容と命を象徴する夢

1881. 新たな決意

今朝は6:20から一日の活動を開始させた。昨夜から、私はバッハの前奏曲第9番を繰り返し聴き続けている。この日記を書いている今も、わずか一分半ほどのこの曲だけを繰り返し聴き続けている。

創作を通じた人間発達の考究とその実践。それだけを行いたい。それだけに従事しながら人生の最後の日まで歩みたい、と昨夜改めて思った。その考えに揺らぎはなく、今朝もその考えの熱に私は包まれている。

創作を通じた人間発達の考究とその実践は、もはや自分の信条になりつつあるようだ。私は来年、本当に大きく人生の舵を切るかもしれない。

創作に伴う歓喜と充実感、そしてそれがもたらす幸福をどこまでも深く追い求めたいのだと思う。それは、歓喜や充実感、そして幸福感を獲得するという意味での追求ではない。それよりもむしろ、それらが一人一人の人間の中で生み出され得るということの追求であり、それらがこの現代社会で広く浸透していくための追求である。

この社会で生きる多くの成人や子供が、創作に伴う生への充実感と幸福感を感じられるようになったら、どれほど望ましいだろうかと考えざるをえない。そうした状況は私の単なる理想でしかないのかもしれないが、人々の日々の生活の中になんとかして創作活動を取り入れてもらえないだろうかと考えている。創作活動は何でもいい。盆栽、絵画、作曲、料理、詩など様々なものが創作活動に該当する。

私たち現代人は、どうもこうした創作活動に従事するための心の余裕や時間的余裕を欠いているのではないだろうか。さらには、私たちが本質的には創作を通じて内面の成熟を遂げていくということを見過ごしているのではないだろうか。また最も重要なこととして、私たちは創作を通じて、この世界で生きることの喜びと感謝を感じ、日々の生活がより豊かに、かつ幸福なものになることを知らないのではないかと思う。そのことをどうしても伝えたいのである。

だが、今私には、それを伝えるための良い手段がない。だからそれを学術的な形で探究し続け、自ら作曲という創作活動に日々従事することによって何かを伝えようとしているのかもしれない。

今日、この日から私が取り組むべきことは、創作活動を通じた人間発達の探究である。とにかくもう私は、自分が心底情熱を注げるものしか探究しない。それだけに従事しながらこの世界に参与していく。これを新たな決意としたい。2017/12/9(土)06:36

No.526: Diary and Music

Someday, I want to compose music for each entry of my diaries. Each of them represents unique music.

Each day is music. Each moment is music. My life is music.

That is the basic principle penetrating in my entire life. 21:44, Wednesday, 12/13/2017

1882. オーストリアの片田舎オーベルンドルフでの記憶

日々自己を取り巻く現象によって内側に喚起される事柄を、日記や作曲として形にしていく日々が始まってしばらく経つ。それは文章による日記であり、音楽による日記である。

私は文章の執筆にせよ、作曲にせよ、それらを日記のように行うことが持つ、独特の意義と価値を見出し始めている。それらを大袈裟な形で行うのではなく、誰もができる形でそれらを行いつけているのが自分の日々の活動だと言える。

毎日日記を書くことと毎日曲を作ること。それは今日という日を造形することであり、明日を作ることになりはしまいか。

人生の一つ一つの日々を言葉として、音として造形していくのである。造形の持つ喜び。造形がもたらす充実感と幸福感。それらを感じる中で私は日々を過ごしたい。同時に、多くの人にそれらを感じてほしいという望みがある。

自分の人生を生きるというのは、自己を著述することではなかったか。著述の形は何であっていいのである。私の場合は、言葉を通じての著述であり、音を通じての著述である。そのようなことを考えていると、創作活動と著述活動は等しいということが見えてくる。創作とは、自らを著述し、この

世界に自らを造形していくことなのだ。さらには、表現物を造形していただくだけではなく、自己そのものを造形してくことが、創作の本質なのだろう。

昨夜、私はなぜだか、今年の春に訪れたオーストリアのオーベルンドルフという小さな町での体験について思い出していた。

オーベルンドルフは、モーツァルトの生誕の地であるザルツブルグから電車で数十分ほど北上したところにある。私がオーベルンドルフを訪れたのは、この町にある、『きよしこの夜』が誕生した教会に足を運ぶためであった。目的は、ただその教会に行くことであった。

私は、オーベルンドルフという町、そしてこの町が『きよしこの夜』の誕生の場所であることを、高校生の頃に父から聞いていた。父の話を聞いてから、十年以上もの月日が経って、私はオーベルンドルフという町に降り立った。山間にあるオーベルンドルフ駅に到着した時の光景を、私は忘れることができない。

改札口などは存在せず、小さな駅舎がポツリとそこに佇んでいた。駅から望む雄麗な自然の姿に私の心は踊った。

目的地の教会に向かうまで、父と自分が時代をまたいでこの町に来たことの意味について考えていた。オーストリアの片田舎にあるこの町に、親子が十年以上もの時間差を超えてやって来たことの不思議さについて私は考えていたのである。そこに私は、親子の間に存在する絆を見て取った。父は私の父であり、私は父の息子なのだというごくシンプルな気づきが、どれほど感謝の念と幸福さをもたらしたのだろうか。

昨日、初雪を経験したフローニンゲン。今日の最低気温はマイナス2度とのことである。今日は雪が降るだろうか。私は、書斎の窓の外に広がる不動の闇の姿を見ながら、自己が充実感と幸福感で溶解してしまうような感覚に包まれていた。2017/12/9(土)07:08

No.527: Inquiry from Our Life

Yesterday, I received an email from my father that contained some insightful remarks. He referred as Viktor Frankl to argue the meaning of our life.

Surprisingly, my father's thought on the existential definition of our life was almost perfectly similar to mine. I realized that I was actually his son.

We often ask our life, but it misses the point. Our life asks us.

What am I asked by my life? What does my life today ask me?

I am listening to the voice of my life. 13:11, Thursday, 12/14/2017

1883. 意識的な鍛錬とゆっくりと眺めることの効用

今朝、気づかないうちに、バッハの前奏曲第9番を150回ほど繰り返し聴いていることに気づいた。この曲の何かに取り憑かれたかのように、グレン・グールドの演奏するこの曲を延々と繰り返し聴いていた。

私は本当に繰り返しが好きなのだと思う。それも単なる繰り返しではなく、絶えず差異を内包する有意味な繰り返しが好きなのだ。絶えず差異を内包する有意味な繰り返しとは、私たちの日々に他ならないのではないだろうか。本来、私たちの人生における毎日は、絶えず差異を内包した有意味なものなのだ。

早朝、激しい雪のつぶてが空から降ってきた。それが窓ガラスにぶつかる音は小刻みであり、軽快なリズムを刻んでいた。

バッハの前奏曲から一旦離れ、今度はグリーグの曲を聴くことにした。一体どれだけ優しい音色を生み出した作曲家なのだろうかと思わずにはいられないほどに、私はグリーグの優しい調べに引き込まれていった。

現在私は、グリーグの叙情曲集を最初から順番に分析することを行っている。午前中に四曲ほどの分析を終えた。つくづく、曲を聴き流すのではなく、楽譜を目で追いながら曲を聴き、そして楽譜に対して自分なりの意味付けを行ってみることがいかに有益かを知る。これは外国語のリスニングと全く同じであり、楽曲を意識することなく聞き流していても、その曲の持つ意味を深く理解することなどできはしない。

米国で生活を始めた当初、英語を聞き流すことによってリスニング力を高めようと思ったが、それは全く効果がなかった。楽曲を理解するためには、意識的な鍛錬が必要であり、その鍛錬の成果が結果として無意識の次元に浸透していくのである。無意識に行う鍛錬など存在せず、それは単なる惰性による無意味な繰り返しである。

意識的な鍛錬の末に、結果としてそれが無意識の次元における鍛錬を誘発していた、ということならありえる。だが、出発点を無意識の鍛錬に置いては決してならないのだと思う。それは私が、過去に無意識に行う鍛錬から始めようとして、結局何も身につけなかった経験から言えることである。

とにかく私は、日々の作曲実践に並行して、優れた楽譜から範を得る実践を続けていく必要がある。知らず知らずのうちに、書斎のソファの上には、多くの作曲家の楽譜が積み上げられるようになった。オランダで生活をしているうちに、それらの楽譜の全曲に少なくとも一回は目を通す。つまり、それらの全曲に対して、意識的に楽譜を眺めるということを行う。

今朝方、ある教育研究者が「ゆっくりと眺めることの効用」について述べている記事を見つけた。その研究者は主に、アートを対象に持論を展開していたが、「ゆっくりと眺める」という行為は、アートのみならず、音楽においても極めて重要なことではないかと思う。

とにかく時間の流れが速いこの現代社会において、芸術対象をゆっくりと味合うことの意義は計り知れない。また、それは芸術対象のみならず、そこから拡張させて、日常の諸々の現象に対しても適用されるべき発想かつ実践だと思うのだ。

今日もゆっくりと自らの探究と向き合い、生起する諸々の現象一つ一つを立ち止まってゆっくりと味わうようなゆとりを持ちたいものである。2017/12/9(土)09:53

No.528: Piano Works as “Scriptures” and “Sculptures”

I hope to compose music someday that can disclose and share the hidden “scriptures” and “sculptures” of transcendental beauty in our life. I am a sculptor as well as a composer.

The sunny clear blue sky is expanding in front of my eyes at this moment. It embodies both ephemeral and eternal aspects of this reality. 13:21, Thursday, 12/14/2017

結局、日々自分が従事している学術研究というのは説明行為に過ぎず、学術研究の価値は多大なものでありながらも、それより重要なのは生きた体験だということに気づかされる。

私は人生の舵を大きく切り、これから芸術を通じた人間発達、及び芸術教育に関する研究をすることに決めたが、芸術行為の中に絶えずあることが大切だ。外面からの記述と内面を通じた直接体験の違いは極めて大きい。両者は共に重要であり、どちらかに偏ってはもちろんならない。しかしながら私は、内面を通じた体験をより大切に生きたいと思う。そこに自分の生の固有性が宿るからである。

芸術活動を外側から眺めるような姿勢ではなく、それよりも、実際に自分が芸術活動の参加者になって、直接体験を通じて芸術を掴み、自らの存在の根源を掴んでいこうにしたい。私の関心は今、芸術を通じた人間発達と芸術教育に向かっているのは知っている。しかしながら、自らが絶えず芸術活動に従事しているということが何にもまして大切なのだと思う。それを忘れてはならない。

芸術への関心。そこに向かった理由については、今は多くを述べることができない。文字どおり、自分の中で何も整理されておらず、他者に伝わる形でそれを表現することができないのだ。だが、一つだけ言えることがある。

私が芸術へ大きな関心を持った理由は、「このような時代だから」ということに尽きるかもしれない。こうした時代だからこそ、芸術を通じた人間発達と教育を探究してみたいのだ。そして何より、私自身の存在がもう、芸術の炎の中で溶けてしまいそうなのだ。

確かに、私は今後も、科学的探究と哲学的な探究を続けていく。しかし、それだけの範疇に留まって生きることもはやできないのだ。そこに芸術行為が加わり、芸術探究が加わった。もうそれらを離さない。

今朝方、芸術を通じた人間性の回復について少しばかり夢想をしていた。とりわけ、芸術を通じて家族や人との絆が増すことを願ってやまない自分がそこにいた。なぜだか私は、この世界に存在する家族が美術館に一緒に行ったり、音楽を一緒に聞きに行く姿を想像していた。そして、そうした鑑

賞行為のみならず、家族が一緒になって絵を描いたり、一緒になって作曲をしている姿を想像していた。人と共に行う鑑賞行為と創作行為がそこにあった。

こんな時代からこそ、そうした時間が家族の中に少しでもあってほしいと強く願う。こんな時代からこそ、私は芸術を通じた人間発達の探究に目覚め、日々自らが創作行為に打ち込むことになったのではないか、と思うのである。

芸術には何かがあるのだ。人間性を回復させ、人間を育んでいく何かがきっとそこにあるのだ。

2017/12/9(土)10:09

No.529: Imitation of Exemplars

Great previous piano works are exemplary for my music composition. They play a scaffolding role to solidify my composition skills. I think that I will concentrate on imitating those exemplars for at least four years. The accumulation of the patterns of beautiful piano works would lead me to the place that I cannot imagine now. 15:03, Thursday, 12/14/2017

1885. UFO目撃

「UFO? UFOだ！」

私は思わず心の中でそう叫んだ。夕食中、食卓の窓の外から見える雪景色を何気なく眺めていたところ、それは姿を現した。

私の母は大学生だった頃、UFOの出現からそれが消え去るまでの一部始終を目撃する体験をしたそうだが、それは本当だったのだと思った。

「やっぱり存在してるんだ、UFO」と私は思った。

UFOに関する話は母から度々聞いていたが、それを幼少時代に聴いて以降、私はしばらく夜中に激しく光るものを見た時に怖くなることもある。

幼少期の頃、社宅に住んでいた時、就寝中にいきなり外から自分の部屋に眩しい光が入ってきた時などは、「宇宙人に連れ去られる」とビクビクしていた。いつもその激しい光の正体は、ご近所さんの車のヘッドライトが反射して自分の部屋に差し込んできたものだった。

つい最近まで私は、そうした激しい光を就寝中に感じると、異星人と遭遇してしまうのではないかと恐れていたが、このところは異星人と遭遇するのは幸運なことなのではないか、と思い始めている。ただし今でも、「丑三つ時」の時間帯に目を覚まし、その瞬間の時刻が丑三つ時であるとわかると、幽霊が見えてしまうのではないかという恐怖から、さっと目を閉じるようにしている。丑三つ時だけは今でもダメだ。

偶然ながら、夕食を食べている最中に、もしかすると自分は今後、一旦この星を離れて自らのなすべきことに打ち込む期間があるのではないかということを考えていた。一年間ほどこの星から離れて生活をする、いろいろと協働者の方に迷惑がかかるであろうから、半年間だけならこの星から離れて生活するのも許容されるのではないか、と思っていた。どれくらいの期間であれば地球を離れて生活できるのかの計算を頭の中で行っている自分がいた。

母国を離れ、この世界の様々な場所を転々としながら人生を送ることを続けていると、つくづくその生活環境でしか喚起されえぬものがあることに気づく。また、その場所でしか出会えぬものが数多くあることに気づく。そうしたものの一端を人は「文化」と呼ぶのかもしれないし、そうした出会いのことを人は「その場所でしか生まれえぬものとの邂逅」と呼ぶのかも知れない。

日々の一挙手一投足が全て自らの創作活動である状態で生活を送るためには、私は母国以外の国で生活せざるえをえないことをもはや知っている。日本に戻れない大きな理由の一つはそれだ。自らの内側の現象を形にすることでこの世界へ関与していくことが自分の人生であるならば、もしかするとこの星を離れてその活動に打ち込む必要があるのではないか、そしてそれは今後本当にやってくるかもしれない、ということを感じる。

この星を離れて探究活動に従事し、それを形にすることを通じてこの世界に関与していこうという発想が突発的に生まれたのは、南カリフォルニアのアーバインで生活していた時のことだった。今日もまた、地球を離れて生活を営み、自らの仕事に邁進する自分の姿を想像していた。そのような

想像を膨らませていた時に、黄色く光り輝くそれが突然姿を現したのである。私は自分の目を疑った。

円柱のような光が現れ、それが一瞬にして消え、再び点滅をしてまた消えたのである。「UFOが池の水を汲み終え、突然瞬間移動したという話を母から聞いていたが、あの話はやはり真実だったのだ」と私は思った。

再び光が現れるかどうかしばらく待っていると、また現れた。だがそれは、欧州の過酷な冬がいよいよ始まったことを激励するような花火大会の花火だった。

死後の世界とUFOというのは興味が尽きないテーマであり、今回の件をもってして母の話の信憑性が下がったわけでは決してない。仮にいつかこの星を少しばかり離れて生活をする日が来たら、母が見たものを検証する機会に恵まれるかもしれない。2017/12/9(土)19:36

【追記】

たった今、上記の日記を何気なく読み終えた。すると突然、とても奇想天外な考えが芽生えた。母は大学時代のある日の深夜にUFOを見たと言う。UFOの出現から瞬間移動の一部始終を見ていたそうだ。それを思い出して、私はふと、母がそこでUFOを目撃した際に、地球外の何かを受け取り、のちに自分が生まれた際にそれが自分の内側に混入してしまったのではないかと突然思ったのである。確かに私は疑いようもなく地球人なのだが、幾分異星の要素を持っているのではないかと最近思うことがあり、上記の日記を読んで一人合点が行く次第であった。フローニンゲン:2019/1/7(月)09:19

No.530: Vibration and Music Composition

Learning music composition feels like learning mathematics and a new language. Composing music often feels like writing programming codes or solving chess problems. However, the main difference is that only music composition vibrates all senses within me and even my spirit and soul. 15:31, Thursday, 12/14/2017

1886. 世界の始動

一昨日に引き続き、昨日も雪が降っていた。いよいよ骨身にしみる冬の時代がやってきた。だが、欧州での二回目の冬を迎える私の心は相変わらず明るい。

今朝は五時前に起床し、五時を少し過ぎた時点で一日の活動を開始させた。今日は名目上は日曜日だが、どの曜日とも変わらずに、私は文章を読み書きし、曲を作っていくだけである。

創るために起き、創るために呼吸をし、創るために寝るだけの生活。そんな生活が欧州での二年目から本格的に始まって大変嬉しく思う。人生の最後の日を迎えるまで、私は創ることだけに日々を捧げたい。献身が創出を生み、創出が献身を生み、両者が完全に合一する日も遠くない。欧州での二年目の生活はその始まりの年だったのだ。

昨夜は夢の中で、中学校時代に遡り、合唱コンクールに向けた準備をしていた。音楽の時間に、コンクールの時に演奏する曲を練習することになったのだが、ピアノの演奏者が誰もいないようだった。その事態にクラスメートが右往左往している。その様子を見た私は、自分がピアノの演奏を買って出ることにした。クラスメートは皆、私の方を見て目を丸くしている。というのも、中学校時代の私は音楽や美術とは無縁であり、運動と学校の勉強しかできない人間だと思われていたからである。

友人:「えっ、かつちゃん、ピアノの演奏できるんやったけ？」

私:「できんかったけど、一週間前から練習始めたんよね」

友人:「一週間前？それ、わややない？」

私:「わやかかもしれんけど、大丈夫なような気がする」

ピアノの練習を始めて一週間と述べたが、それも語弊があり、MIDIキーボードを使ってパソコン上で作曲を始めたのが一週間前のことだった。私はピアノの演奏をするために10分間ほど仮眠をさせてもらうことにした。夢の中で、もう一段深い夢の層に入っていくことになり、10分後に目覚めた。クラ

スマートは皆、私が現れないことを心配していたようだったが、もう一度音楽室に現れ、私の伴奏で合唱の練習をすることになった。

いざピアノの前に向かうと、その瞬間に目の前のピアノが小さなMIDIキーボードになった。しかもそれは、普段私が使っているものよりも小さく、とても使い勝手が悪そうだった。

私:「一オクターブ上がる時はどのボタンを押せばええん？」

別の友人:「このボタンを押さんと上がらんよ。うちもよく使い方わからんのんよ」

隣にいた女子生徒がそのように述べたとき、私は若干途方にくれた。しかし、それでもなんとか演奏をしようと思いついて、演奏を開始したところで夢から覚めた。

今日のフローニンゲンの朝はやたらと静かだ。雪も降っておらず、そして風もない。全てが止まってしまったかのような静寂だけがそこにある。

早朝五時半の書斎の中に、バッハの前奏曲第9番が繰り返し鳴り響く。昨日は五時間ほど外出をしたにもかかわらず、自宅にいる最中に、気づけばこの曲を300回ほど繰り返し聴いていた。今朝もリピート機能を用いてこの曲だけを聴いている。

雪だ。雪が降り始めた。

全てが止まってしまったかのように思えた世界が、今動き始めた。天から舞い降りる粉雪を見ながら、私もまた動き始めようと思う。2017/12/10(日)05:39

No.531: Seized by Piano

I don't have any intention and motivation to compose music except for piano works. I was reflecting upon it, but I won't say anything about it here. Composing only piano works requires domain specific knowledge and skills. It is true to composing a symphony and concerto.

Since I'm not a professional composer but an amateur composer whose heart is seized by piano. I'll just concentrate on composing only piano works because piano is my soul instrument.

16:23, Thursday, 12/14/2017

1887. 人生最後の瞬間の自己との邂逅

昨夜、最後の砦について考えていた。仮にこの世界の他の全ての人たちがあつた一つの同じ方向に向かつて歩き出したとしても、私はその反対側に向かつて歩かなければならないと思った。これは天の邪鬼のような発想から生まれたわけでは決してなく、自他に対して私ができるのはそれぐらいしかないと思われたのである。

この世界は、ある一つの極の対極があるから成り立っている。対極がなければ、対立や葛藤からの均衡を通じた発展はない。

人間であろうとし、人間として生きることを意味が何なのかを突き詰めた挙句、この世界の他の全ての人たちが向かわない生き方を採用することは道理にかなつており、この世界に対して私ができる唯一の貢献はそれしかないように思われた。

一本道。自らが歩む過程の中で、他者が選ばない一本道が自然と生まれる。私はその上を紆余曲折しながら歩いていくしかないのだと思う。この点については何度も何度も繰り返して書いていかなければならない。人間が人間として生きることは何かを愚直に問い、「問いからの問い返し」に愚直に従いながら生きていく。

社会の価値観も自分の価値観すらも一切関係ない。「問いから生まれる問いへの問い」に対する自らの自発的な行動についていく形で、私は生きて行く。それしかできない。

雪の降る景色を眺めながら、昨夜もまた、今年の三月に訪れた、ザルツブルグでの啓示について思い返していた。ザルツブルグのとある横断歩道で得た啓示。

国際非線形ダイナミクスの学会を終えた夜、科学者としての仕事をしていることへの大きな充実感を私は感じていた。私は、まさか自分が科学者になるとは思つてもおらず、人生のそうした不思議さ

について、ホテルの自室で想いを馳せていた。学会を終えた翌日の朝、ホテルを出発した私は、ザルツブルグの中央駅に向かっていた。私は、ザルツァハ川を越えたところにある横断歩道に捕まった。信号が変わるのをしばらく待ち、青が変わって一步を踏み出した瞬間、自分が作曲家「である」ことに突然気づいた。「自分は作曲家なのだ・・・」という気づきに、私は自分でも驚き、少しばかり呆然としていた。

驚嘆から生まれる笑みが自然とこぼれる。何一つ楽器の演奏経験のない私は、自分がピアノ曲だけを作る作曲家であることにその時気づいたのである。そこからまた、私の人生が新しく始まった。哲学的な探究と科学的な探究、そして、とりわけ音楽を中心とした芸術と一生涯を通じて寄り添いながら生きることをその時誓った。

「作曲家になろう」という未来形ではなく、「自分は作曲家である」という現在形の言葉がなぜ降りてきたのだろうか。昨夜はそれについて少しばかり考えていた。

未来形ではなかった端的な理由は、その言葉を発したのは人生の最後の日の自分だったからなのではないか、と考えていた。今から90年後の人生最後の自分がそのように述べたのだ。

この瞬間に絶えず息づいている未来の自分、人生最後の瞬間の自分がそのように述べたのであれば、現在形の形を取ったとしても何ら不思議はない。

ザルツブルグの横断歩道で、人生を終える最後の日の自分がその瞬間に立ち現れたのであれば、その時の自分が作曲家「である」と認識されても何らおかしいことではないだろう。

哲学、科学、音楽。それらを通じた途切れることのない創造行為を今日も行う。

バッハの前奏曲第9番が、本日40回目の始まりを告げた。自己が完全なまでに、有意味な差異を内包した反復となり、その反復として人生最後の日まで歩いていく。2017/12/10(日)06:08

No.532: Gut Feeling

I want to compose music based on my father's poems someday. Although it is a causal remark, I feel that it will be significantly important in my life. This notion comes from my gut feeling.

1888. アイデアの豊穡な多面性

数日前、いかに知覚対象を音に転じていくかを今後の大きな主題にしようと思った。この書き方は軽薄な響きのように聞こえるかもしれないが、自分の中では切実な主題であり、それ以上ないほどに希求する事柄だ。

知覚対象のありのまま性、如性を掴み、それを自分の存在を通すことによって、固有な音をいかに生み出していくかという問題。もう少し問題設定を具体化すると、対象のアイデアから生み出される多元色な派生対象を、いかに的確かつ迅速、そして即興的に曲の形にしていくかが、大きな主題として立ち上がっている。

今の私には、知覚対象のアイデアそのものを掴み、それを曲にするのは不可能なのではないかと思われる。というのも、対象のアイデアは絶対的に一なるものであり、私に見えるのは、そうしたアイデアが持つ変幻自在の一側面でしかありえないように思えるのである。言い換えると、私が日々知覚できるであろうことは、状況や文脈に応じて変幻自在に姿を変えるアイデアの一側面でしかないということだ。例えば、昨日のように、フローニンゲンの駅で売られている美しい花にハッとした瞬間、私はその花のアイデアに触れていただろう。だが、触れていたものは厳密にはその花のアイデアそのものではなく、その花のアイデアがその瞬間に私に開示してくれたアイデアの一側面でしかないように思われたのである。

花のアイデアに触れた瞬間に得られた感動をもとに作られた曲と、全く違う文脈で花のアイデアに触れた瞬間に得られた感動をもとに作られた曲は、全く異なるものになると思われる。花のアイデアという絶対的に一なるものに触れて曲を作ったにもかかわらず、その瞬間の自己が置かれた文脈によって、表現される曲は変わりうるのだ。当然これは、文脈の変化によって、認識主体である自己そのものが変化しているからだろう。文脈が変化し、自己そのものの視点が変わると、アイデアの見方が変わり、これまで見えていなかったアイデアの側面が開示されるのではないかと思う。であるから、一つの究極的なアイデアが持つ豊穡な多面性に気付けるのだ。

私は、究極的なアイデアを曲として捕まえたいとは思っていない。その瞬間、今というその瞬間に自分の目の前に一瞬姿を現してくれるアイデアの一側面を曲として表現したいのである。その方法など皆目見当はつかないが、その実現に向けて今日も作曲実践に励む。

文章で書き残される日記の数と同じだけの、日記的な曲を毎日残していきたい。それが実際に実現されるまでの道のりは険しく長い。だが、日記として書き留める対象が、何らかのアイデアの一側面であるならば、日記と同じ数だけ毎日曲が生み出されないことの方がおかしいのではないだろうか。

今も、この瞬間も、無数のアイデアはその絶対的な姿を私たちに開示しているにもかかわらず、日々を惰性でせわしなく生きる私たちにはそれが見えない。それもまた全くもっておかしな話である。

2017/12/10(日)06:27

No.533: Worthiness

It is absolutely worthwhile to bet the rest of my life in music composition. I thought so. I felt so. So did my spirit and soul. 22:00, Thursday, 12/14/2017

1889. 高齢者の美的認識世界への関心

昼過ぎに見た、雪の吹雪く姿は圧巻であった。今も少しばかり雪が舞い落ちている。

午後に見た大雪は、雪が真横に吹き付けており、外の世界が一面雪化粧に包まれた。私は仕事の手を止め、雪の世界と一体となるかのように、雪が地上に舞い落ちる姿をただただ眺めていた。

時刻が四時半を過ぎた頃の、圧倒的な寂寥感を漂わす外界の世界もまた圧巻だった。もうその時刻には辺りは暗くなっており、五時を過ぎれば真っ暗となった。

新たな研究テーマとして浮上した、芸術を通じた人間発達と芸術教育について、なんとか形となる研究をしたいと強い思いが今日も湧き上がる。もしかしたら、博士課程の研究テーマはこれになるかもしれないという予感がしている。

私は子供と成人の双方を対象にし、とりわけ彼らの美的経験の発達と作曲技術の発達を探究していたと思っていた。しかし突如として、対象を高齢者にしたいという思いが噴出した。

作曲を通じて人生に新たな意味を見出し、それを通じてこの生を存分に生きる一つの手だてになるような研究ができないだろうか、そのようなことをずっと考えていた。人生の円熟期から終焉に向けて生きる人たちの内面世界は一体どのようになっているのだろうか。これは研究者としての自分から生まれる関心でもあり、人間としての自分から生まれる究極的な関心でもある。

どうも私には、人生の終焉に向けて日々を生きる人の美的経験は、人生の最後を意識しない人たちと異なるのではないかと思えて仕方ないのだ。人生の最後を意識する人たちに固有の美的世界認識はいかなるものであり、その認識世界から生まれる音楽表現に大きな関心がある。

高齢者の美的経験の発達過程を、美学の観点と発達理論の観点から定性的に調査を行う。そして、高齢者の作曲技術の発達過程を、複雑性科学の定量手法を用いて分析していく。そのような研究を行ってみたいという思いに駆られていた。

人生の最後に向かって日々を生きる人たちとの交流を通じた研究に着手してみたいのだ。私は何かに突き動かされるように、来年に所属予定の米国の大学院の教授陣にこの研究テーマを行えるかの打診を行うメールをした。

バッハの前奏曲第9番が、本日およそ400回目の音を奏で始めた。ふと窓の外を見ると、ひっきりなしに雪が降り続けている。この分だと明日は雪が随分と積もっているかもしれない。実際に今もすでに、道路に雪がうっすらと積もり始めている。積もる雪を見て、日々自分の人生に積み重なっていく何かを感じた。2017/12/10(日)17:46

No.534: Grace Note and Trill

I don't still grasp the proper timing and place to use a grace note and a trill. What is the underlying principle to apply them? I need to investigate it on the basis of analysis on exemplary music scores. 08:10, Friday, 12/15/2017

早朝の六時過ぎに起床してみると、辺りは一面雪に覆われていた。柔らかな雪が地面を覆っており、凍てつく寒さであるにもかかわらず、その様子はどこか優しい。

長く続く闇の世界、そして氷点下の世界の中、そうした過酷な環境に押しつぶされることなく、むしろ私はこうした環境に身を置いていることに感謝している。その思いは日を増すごとに強くなる一方だ。

秋から冬に向かう過程の中で、結局私は大きな葛藤を経験することはなかった。当然ながら小さな揺れを絶えず経験していたと思うが、昨年のように、過酷な自然環境と相まって引き起これる精神的葛藤を経験することはほとんどなかったように思う。昨年に比べて、精神の胆力が備わったのかもしれない。

このところの私は、毎日が夢のように充実している。それをもたらしてくれているのは、作曲実践であることに疑いはない。日々、自然言語で日記を執筆していくことに並行して、音楽言語で日記を執筆するかのように作曲実践を行うことが、毎日をこれだけ豊かにしてくれるものだとは思ってもいなかった。

創作活動に潜むこの力をなんと形容したらいいだろうか。創作活動は私たちの発達を促すのみならず、生を充実したものにさせ、溢れんばかりの幸福感を日々の生活の中にもたらし。創作活動が私たちにもたらし発達力と生の充実については、これから本腰を入れて探究をしていく必要がある。それは本当に私の大きな主題だ。

創作活動に伴う喜びとそれがもたらす充実感を多くの人に共有したいという思いがある。それが私を新たな方向に導き、その研究と実践に向かわせたのかもしれない。まずは創作活動を通じた発達に関して、科学的かつ哲学的な研究を行っていきたい。絵画と音楽の双方ともに私の人生になくしてはならないものだが、実践として日々行っている音楽に関する探究を優先させる。その探究を進める際に、二つの研究項目がある。一つは、音楽を通じた美的経験の発達過程である。各人が持つ美的経験の質的差異を明らかにし、その発達プロセスを追いたい。

当然ながら、子供から成人期にかけての発達プロセスに関心はあるのだが、今はどういうわけか、老年期の人々の美的経験に関心を寄せている。意識するしないに関わらず、静かに迫ってくる死というものが、私たちの美的経験に何か大きな影響を与えているのではないかと思うのだ。その影響を直接的に調査することは難しいが、老年期の人々の各人固有の美的経験の質的差異に焦点を当てることによって、何かしらの洞察が得られるのではないかと思っている。

また、仮に老年期に入ってから作曲実践を始めた場合、どのような発達プロセスを辿るのかにも大きな関心がある。前者の美的経験の質的差異については、哲学の一領域である美学の観点や定性的な研究手法を用いて研究を進めていく。一方、後者については、発達科学の理論と複雑性科学の定量的な手法を活用していくことができる。これまでの自分がやってきたこと、そして今毎日自分が実践していることが全てつながるような新しい研究が今動き出そうとしている。2017/12/11(月)

07:06

【追記】

死と美意識については、ぜひとも定性的なインタビュー手法を活用した研究を行いたい。現時点においては、もはや定量的な研究にはほとんど関心がなく、こうしたテーマであればなおさら定性的なインタビューを活用していきたい。シュタイナーの思想を学び、再びトランスパーソナル心理学や実存主義的心理学を探究し始める時が、上記の研究に着手する最適なタイミングかもしれない。こうした研究を博士論文にまとめていくのであれば、最有力候補はカリフォルニアのソフィア大学だろう。フローニンゲン:2019/1/7(月)09:46

No.535: Mi against Fa

My ears couldn't agree with the basic principle: Mi against fa is the devil in music. I can't still grasp why it should be avoided; both my cognition and body—ears— do not agree with the principle. 15:41, Friday, 12/15/2017

1891. 充実感と幸福感への一体化

今日は午前中に、研究倫理に関するレクチャーに参加する。昨年も似たようなレクチャーを受けたが、今年もまた研究にまつわる倫理的な問題に関するレクチャーを受ける必要がある。

外の景色を眺めると、雪が積もっているため、今日は間違いなく寒いことが予想される。自宅を主発するであろう11時前の気温を確認してみると、マイナス一度であった。久しぶりにマイナスの世界を体験することになりそうだ。日々、外面世界がこのように様々な彩りを開示してくれることによって、私の毎日は本当に充実したものになっていると思う。夜が明ける時間が九時近くになっても、日の沈む時間が四時半になっても、そして厳しい寒さが全ての時間を包んでいたとしても、私の内面世界は常に充実感で満たされている。

日々の瞬間瞬間が絶えず、「それでよし」と告げる。その言葉は、日々の生に充満性をもたらす。それこそが本当のフルネスだ。

充実感や幸福感とは本来獲得されるものでも、感じられるものでもないのだろう。究極的には、自己の存在そのものが充実感や幸福感に他ならないということに気づかなければならない。でなければ、私たちはそれらを獲得しようとする発想に絡め取られ、それらを感じようとする安易な体験主義に陥ってしまうだろう。極論を言えば、充実感や幸福感の充満性によって、一度自己が破裂してしまえばいいのだと思う。それは解体というよりも、溶解であり、没入だと言っていいかもしれない。それが起これば、自己の存在そのものが充実感や幸福感であることに気づくだろう。

今日は午前中のレクチャーを終え、自宅に戻ってきたら、午後からは新たな研究のスケジュールを立てる。スケジュールと言っても細かなものを立てる必要はなく、研究の各フェーズを明らかにし、それをどの時期にこなしていくかを明確にしておく。

研究テーマをもう一度俯瞰的に考え直し、既存のアイデアをさらに深めていきたい。研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授から先日いただいたフィードバックを元に、ここでもう一度研究案を練り上げる。本日取り組むべき研究課題はそれぐらいだろうか。日々為すべきことを明確にし、これまでと変わらず一步一步前へ歩みを進めていきたいと思う。そういった思いを日々持っている、気づけば一時帰国の時期が迫ってきていることに気づいた。

来週の水曜日に、私は一年振りに日本に足を運ぶ。滞在期間はそれほど長くないが、とにかく静かに日本で生活を営みたいと思う。2017/12/11(月)07:27

No.536: Visit to Utrecht

I'll visit Utrecht tomorrow for sightseeing. I'll bring one book, "Guide to Practical study of harmony" written by Tchaikovsky.

My current theme for music composition is harmony and counterpoint. Since the winter vacation begins from next Wednesday, I can spend much time on music composition, focusing on the topics mentioned above. I expect that my composition skills will be enhanced after the vacation. 19:28, Friday, 12/15/2017

1892. ゆとりを持った研究スケジュール

今日は昨日に引き続き、雪が絶えず降り続けていた。時刻は夜の八時を迎えているが、今もまだ外は雪が降り続けている。

昨日と今日の雪によって、フローニンゲンの街は、一面雪で覆われた世界と化した。二日連続で雪が降ると、白銀世界がそこに広がる。フローニンゲンの街に降る雪は、東京の雪に比べて積もりやすい性質を持っているのかもしれない。

今も粉雪が降り続けており、時間の経過と共に世界がより一層白く覆われていく。書斎の窓から外の景色を眺めると、闇夜の黒と雪の白が見事な対称をなしているかのようである。そんな雪の降る今日は、研究と作曲を粛々と進めていった。とりわけ、MOOCを対象とした研究に関しては、研究計画書をさらに洗練させることができ、論文の完成に向けたスケジュールを組み立てた。今回の研究で意識をしているのは、急いで研究を進めていかないことである。実際に、研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授からも同様の助言をいただいている。そのため、研究スケジュールをゆとりのある形で設定し、このスケジュールに沿って研究を進めていきたいと思う。

研究計画書を提出し、本格的に研究を始めるのは来年の一月末からであり、論文を完成させるのは六月の初旬を予定している。私はいつも研究に没入し、研究をどんどんと進めていくような癖があるため、今回はあえてそうした衝動を抑えながら研究を進めていきたい。というのも、研究プロジェクトに並行して、研究インターンを行うことになっており、その他にも日本企業との協働プロジェクトも

あるため、今回の研究に没入してしまうと、自分の生活にゆとりが消えてしまうと思うからだ。そうしたことを防ぐためにも、あえて研究スケジュールをゆとりのあるものにし、それに従って研究を進めていくようにしたい。学術研究や日本企業との協働プロジェクトの合間合間に、日々必ず作曲実践をする時間を設けることも、生活の中にゆとりを作る上で大事になる。

数ヶ月前に作曲実践を始めるまでは、私は学術研究とそれに関連する実務だけに従事しているような生活であった。そうした日々も充実していたことは間違いないが、逆に言えば、それらの活動にしか従事しておらず、時にそれが自分の生活から心のゆとりを奪っていたと言えるかもしれない。

来年以降においては、現在のように、日々の生活の中に作曲実践を組み入れ、学術研究と音楽探究の双方に従事し、心にゆとりを持って日々を送りたいと思う。複数の実践領域に従事し、時間と心のゆとりを設けることは、来年において特に意識していきたいことである。それが実現されれば、日々の生活はさらに充実したものになるだろう。2017/12/11(月)20:27

No.537: Philosophy and Music

From next year, I feel that I spend more time on philosophy and music. In particular, my central themes would be aesthetics of music, philosophy of education, and music composition. Probably, I'll be obsessed with those themes in the rest of my life. 19:40, Friday, 12/15/2017

1893. 来年の研究に向けての下調べ

今日は六時過ぎに起床し、辺りを見渡してみると、一面が雪景色であった。今はもう雪は降っていないのだが、昨日に降り続けていた雪がこのような世界を生み出したのだろう。今日もまた冷え込むことが予想される。

昨日、来年に所属予定の大学院の教授から連絡があった。その大学での新たな研究は、当初、MOOCに関するものにしようと思っていたのだが、ここ最近自分の内側に起こった変化から、芸術を通じた人間発達と芸術教育に関するものにしようと思っている。その教授は、哲学科と教育学科に所属しておられる方であり、芸術に伴う美的経験に造詣が深い。有り難いことに、仮にその大学

に所属することが正式に決まった場合、研究上の助言をいただくことができ、さらには教授のコースを聴講する許可を得た。これはとても嬉しいことである。

来年の研究は、発達心理学、美学、非線形ダイナミクス、音楽の領域をまたいだものとなる。その研究の中で、音楽に関する領域固有の深い知識はそれほど必要ではなく、どちらかというと前者三つに関する高度な理論と技術が要求される。

美学についてはこれから探究を深めていく必要性を感じていたため、その教授に指導の依頼をしていた。また、非線形ダイナミクスにおける時系列データ解析に関しても、私はまだまだ知識と分析技術を高めていく必要がある。そうしたこともあり、同大学院の統計学科に所属しているフランス人の教授にもコンタクトを取った。現在は返信を待っている最中だが、その教授は、非線形ダイナミクスと時系列データ解析に関して造詣が深いため、私の研究に対して助言をしてくれるようになれば非常に心強い。その教授からの返信を受け、その教授が提供している時系列データ解析のコースを聴講できるかも確認しておこうと思う。

今回の研究を進めていくに際して、同様の研究に従事しているような研究者がその大学にいるのかをもう少し調べておく必要があるようだ。とりわけ、心理学科や音楽科の中に、同じような研究分野に関心を持っている教授陣がいるかもしれない。哲学科、教育学科、数学科、統計学科においては、すでにそうした下調べをしていたのだが、なぜだか心理学科や音楽科の教授陣を調べることを怠っていた。今日の午前中に少しばかり調べておきたいと思う。2017/12/12(火)07:59

No.538: Teaching Courses

While I was going to Utrecht by train, I was thinking about what kinds of courses I can offer at university. One possible course would be about dynamic systems approach and nonlinear dynamics in educational research. If I focus on the context of educational research, I will be able to teach the subject in my future. Here, the important point was that I had motivation to teach it.

Imagining that I will teach the course in one semester, I came up with an idea about the contents of the course from the first class to at least tenth class. Although I'm still thinking about the

contents of the rest of the course, it is possible to teach it, and I am certain that I want to offer the course in my future. 21:47, Saturday, 12/16/2017

1894. 対位法の学習

毎日作曲実践に取り組んでいると、自分の課題が次々に見えてくる。「課題」と表現するのが適切なのか、「壁」と表現するのが適切なかわからないが、とにかく曲を作るために学ぶ必要のあることが次々に見えてくるという状況にある。一つ一つ何かが見えてくるたびに、その都度、新しい理論や技術を学ぶようにしている。ここ最近はずっと、メロディーの創出に焦点を当てていた。

集中的に取り組んでいたこともあり、メロディーの創出に関して、0が1になった感覚がある。実際にはここからメロディーの創出の始まりだと言えるだろうが、とりあず0の状態からは脱したと言える。しかし、メロディーが作れるようになってくると、今度はそれを一つの曲としてまとめていくために、ハーモニーを学ぶ必要があることに気づいた。いや、ハーモニーよりも、今の私の最大の関心は、一つのメロディーラインに対して、もう一つメロディーラインを重ねていくにはどうしたらいいのか、というものだった。

そうした疑問に答えてくれそうな領域として、対位法(counterpoint)というものがあることを発見した。早速、対位法に関する書籍を購入し、昨日からその書籍に取り掛かっている。その書籍は、ヨハン・ヨーゼフ・フックスという17世紀後半から18世紀初頭にかけて活躍したオーストリア人の作曲家が執筆したものであり、タイトルは“The study of counterpoint (1965)”である。この書籍は、邦訳として『パルナツス(芸術の山)への階梯』というタイトルで出版されているようだ。

本書の中にある言及を通じて、バッハもベートーヴェンもこの書籍を使って対位法を学習していたことを知った。バッハやベートーヴェンという偉大な作曲家と同じテキストを使って対位法に関する学びを深めていると思うと、なぜだかとても感慨深い。

フックスのこの書籍はもともとラテン語で記されていたようであり、私が持っている書籍は、アルフレッド・マンによる英訳のものであり、分量は150ページに満たないのだが、とても内容が充実している。おそらく本書は、古典的な対位法に関する基礎的な事柄と原則を網羅しているように思える。

本書に関して一つ驚いたのは、この書籍が対話形式を用いており、非常に読みやすいということだ。本書に登場する師匠と弟子の対話を見ていると、どこかソクラテスの対話を思わせる。今日も本書に取り掛かり、初読を今週中に済ませ、来週からはより深くテキストを学んでいく二読目を開始させたい。本書を通じて対位法の基礎を確立し、自分の作るメロディーに対して、もう一つ、あるいは複数のメロディーを巧く重ねられるようにしていきたい。2017/12/12(火)08:16

No.539: From a MIDI keyboard to a PC keyboard

I used to use a MIDI keyboard for my music composition, but I noticed that a PC keyboard enabled me to put musical notes in a much more efficient way because of various short cut keys. Furthermore, a PC keyboard is helpful in that I can compose music anywhere with a PC without bring a MIDI keyboard. It is a huge advantage for me because I have zest for composing music anywhere in the world. 15:38, Sunday, 12/17/2017

1895. 仮眠中の不思議な体験

今日は午前中に、「システムティックレビューの執筆方法」に関するコースの第四回目のクラスに参加した。本来、このクラスには、ジョージアから交換留学で来ているラーナと私の二人が受講者として参加しているのだが、今日はラーナが欠席であった。なにやら、彼女は現在アムステルダムに滞在しているとのことである。ラーナが不在の中、今日も教育科学学科の建物の最上階にある、通称「屋根裏部屋」と呼ばれる場所で、マイラ・マスカレノ教授から講義を受けた。

今日是一对一であったが、受講者が二人の時とあまり変わらず、私は多くの質問をマスカレノ教授に投げかけた。集団講義に比べて、やはり一对一のコースは非常に学習効果が高い。一人の教授との一对一のやり取りを通じて専門知識を学べる機会は非常に贅沢である。今日のクラスでは、システムティックレビューの際に、選定された論文の質をどのように見分けるかの観点を中心に学んだ。

今夜これから取り組む課題においては、今日の学習内容を実際に適用しながら問いに答えていく。来週の水曜日に日本に一時帰国するため、それまでに今週分の課題を終わらせておきたいと思う。

今日は、一対一の授業のためか、いつもより随分と早い時間に講義が終わった。来週は、マスカレノ教授ではなく、デウク教授が講義を担当するらしく、マスカレノ教授と会うのは来年であり、お互いの休暇が充実したものであることを願った挨拶をして別れた。

キャンパスの出口のドアを開けると、朝から降っていた雨が止んでいた。一昨日と昨日に降り続けていた雪を溶かすような雨が早朝から降り続けていたが、昼食前にはすっかりと晴れ間が広がっていた。

午前中の講義を終え、昼食を済ませた後にしばらく経ってから、いつもと同じように仮眠をとった。すると、仮眠中に不思議な体験をした。端的には、自分の身体が空に浮かんでいるかのような感覚を体験した。たった20分間の仮眠の最中、私はグロスの意識からサトルの意識に移行し、さらにはコーザルの意識にも移行していた。ちょうど意識がコーザルからサトルに移行し、20分の仮眠を終えようとしている時に、自分の身体が宙に浮かんでいるかのような感覚があった。

さらには、心的ビジョンとして、自分がピアノを演奏している姿を捉えることができた。自分の内側の音楽が、そのまま音としてピアノから溢れてくる。ピアノから溢れてくる音に乗るような形で自分の身体がどンドンと軽くなっていく。そのような不思議な体験をしていた。

作曲実践を本格的に初めてまだ数ヶ月しか経っていないのだが、ここ最近、自分の内側に潜んでいた音楽が徐々に顕在化し始めているように思う。無意識のさらに深い意識の層に眠っていた、自分に固有の根源的な音楽がどンドン目覚め始めているのを感じる。今日の仮眠中に起こっていた現象も、そのことと関係しているだろう。これから作曲実践を長きにわたって継続させていくと、いったい私の無意識の世界からどのような現象が体験としてもたらされるのだろうか。そのようなことをぼんやりと考えていた。2017/12/12(火) 17:11

No.540: An Email from a Friend

I received an email from my close friend in Japan. He has been one of my best friends since I was seven years old. The content of the email was not so significant, but I was very glad to get the email. Although I usually don't reply an email in the morning, I immediately replied to him without hesitation. Close friends enrich our life. 07:22, Monday, 12/18/2017

1896. 行き詰まり

夜の八時を迎えた頃、今日の振り返りを行うのではなく、ふと昨日の事柄を振り返っていた。昨日もいつもと同様に作曲実践に励んでいたのだが、少しばかり行き詰まりを感じていた。実際のところは、毎日小さな壁にぶつかっており、絶えず課題に直面するような毎日なのだが、いつもであれば作曲行為そのものの喜びが、自分が課題や壁に直面していることを忘れさせてくれる。さらに、毎日の実践の中で直面する課題や壁を乗り越えられる日の方が少ないが、そうだとすると、いつもは作曲実践がもたらす抑えがたい充実感が、課題や壁を乗り越えられるかどうかの有無を一切問わせることのない状態に私を導く。

だが、昨日は作曲実践における行き詰まりを感じていた。具体的には、メロディーを創出した後に、もう一つのメロディーを重ねる方法について考えめぐっていた。さらには、創出したメロディーの背景に他の音を重ねるというハーモニーについても問題を抱えていた。

ここ最近ではメロディーの創出のみに焦点を当てており、少しばかりの進歩を経験した。それはまさに、発達における非連続的な小さな飛躍体験であった。その体験はそれとして喜ばしいものだったが、新たな課題がすぐさま浮かび上がってきたのである。

上述の一つ目の問題を解決するためには、対位法と呼ばれる手法を学んでいく必要がある。今の私には対位法に関する知識は一切なく、ちょうど昨日から読み進めたヨハン・ヨーゼフ・フックスの書籍は大いに参考になるだろう。もう一つの課題であるハーモニーについては、一つ喜ばしいことがあった。本日大学から自宅に戻ってきた時に、イギリスのアマゾンに注文していたハーモニーに関する二冊の書籍が届いていたのである。一冊はチャイコフスキーが執筆したものであり、もう一冊はショーンバーグが執筆したものだ。早速中身を確認してみると、チャイコフスキーが執筆したものが分量が少なく、ショーンバーグの書籍よりも取り掛かりやすい印象を私に与えた。日本に一時帰国する際に持って行く一冊として、このチャイコフスキーの書籍を加えたい。

日本語の学術用語は非常にわかりにくいいため、作曲関係の専門書は基本的に英語のものを読むようにしている。しかし、一般向けのテキストに関しては日本語の方が良いものがある印象を持っており、一時帰国の際にぜひとも何冊か作曲に関する一般書を購入したいと思う。

来週から冬季休暇に入るため、そこでは対位法とハーモニーを中心に学び、引き続きメロディーの創出に関する理論と技術を探究していく。対位法、ハーモニー、メロディーは今後しばらくの間における探究の核になるだろう。

昨日は少しばかり行き詰まり感を抱えていたが、それでも作曲に向かわせる何かが自分の内側にある。自分にできることは、この内側の情熱に従って生きていくことだけである。2017/12/12(火)
20:12

No.541: My Destiny with Books

Last night, I finished selecting books to take to Japan. I thought that these books would not be useful for my future research. I plan to bring some books from Japan to the Netherlands when I go back to Japan next week.

Since I may move to the US next year, I had to reduce the amount of books in my present house. Although I will take some books to Japan, the total amount of books in my house would increase because I will bring back some other books from Japan. It is my destiny that I move around all over the world with an innumerable number of books. 07:34, Monday, 12/18/2017

1897. 衰える日本語の筆記力

昨日、「システムティックレビューの執筆方法」のクラス終了後、教育科学学科の建物内を歩いていると、前の学期の「学習理論と教授法」のコースでお世話になったダニー・コストンス教授に出会った。実は一昨日に、コストンス教授は研究倫理に関するレクチャーを開催する予定だったが、どうやら体調不良だったらしく、そのレクチャーは取りやめになった。コストンス教授と出会って開口一番、まずは体の具合について聞いてみた。

コストンス教授はなにやら風邪を引いたらしく、熱はないのだが喉をやられ、今もまだ少し鼻水が出るとのことであるが、今は随分と体調が良くなったそうだ。そこから私たちは、冬の休暇に関する話をした。私が日本に二週間ほど一時帰国する旨を伝えると、「日本語を忘れてきてるんじゃないか？」と冗談交じりにコストンス教授が質問をしてきた。どうやらコストンス教授はオランダ南部の出

身らしく、長らくその地を離れることによって、北部やアムステルダムの方言が身についてきたらしい。

話し言葉の日本語を普段使うことは確かに少ないが、日本企業との協働プロジェクトのおかげもあり、時折日本語を話す機会があるため、話し言葉の日本語を忘れる心配はない。だが、私が最も懸念しているのは日本語を書くことに関してである。今このように日記を日本語で書くことには全く問題はない。実際に、日本語で文章を書くことに関しては、欧米での生活が長くなればなるほどに、その修練をより意識して毎日を過ごしている。

問題は、物理的にペンを持って日本語を書く機会が皆無だということだ。六年前に日本を離れて以降、国外にいるときは、メモやノートには日本語ではなく英語で文字を書く習慣がついている。これを行おうと思ったきっかけは、英語空間にいる中で、メモによって思考を日本語空間に戻してしまうと再び英語空間に思考を戻すのが手間であるためだった。今となっては、日本にいるときのメモやノートも英語で書かれるようになり、唯一和書を読むときのメモだけが若干日本語で書かれている。

昨日、この問題の切実さを痛切に実感した。この一年半ほど日本語で文字を書く機会がほとんどなかったため、協働プロジェクト関連のある書類に日本語で文字を記入する際の手がとてもおぼつかなかった。少々笑い話に聞こえるかもしれないが、ペンで日本語を記入する手が若干震えていたのである。ひらがなに関しては問題がなかったが、カタカナの組み合わせ方を間違えそうになり、漢字に至っては一文字一文字を辞書でしっかり確認しないといけないという有様であった。

象形文字の特性からか、漢字というのは意識してまじまじとそれを眺めていると、不思議な心象映像が現れることがあり、脳が混乱することがある。そうした混乱に飲まれると、大抵漢字を間違える。実際に昨日もそうした体験をし、文字を間違えてしまう箇所があったので、書類のある一ページを印刷し直し、再度正しく記入をしなければならなかった。これからますます日本を離れて生活することが長くなると、こうした状況はより悪化するのではないかと思われる。

来週からの一時帰国の際に、久しぶりに存在ごと日本語空間に浸り、自分の内側の日本語空間に治癒と涵養をもたらしたいと思う。2017/12/13(水)06:13

I went to Zwolle in the morning to receive a renewal residence permit card. It enables me to stay in this country next year. During the trip on a train, I was reading “Structural functions of harmony (1954)” written by Schoenberg. Although it is quite advanced to my current knowledge, I could obtain some beneficial knowledge that I can immediately apply to my music composition.

I will study this book again and again not only by reproducing ample examples in this book on the music notation program but also composing actual music based on the examples. The actual composition practice would help me to acquire robust knowledge and skills about harmony. 13:22, Monday, 12/18/2017

1898. いつか本格的に作曲を

一昨日より、本格的に対位法を学び始めた。対位法の古典である、ヨハン・ヨーゼフ・フックスの “The study of counterpoint (1965)” を用いて、まずは一回全てを読み通すことにしている。ちょうど半分以上を読み終え、今日か明日中に一読目が終わるだろう。一読目の際に、対位法の細部ではなく、大枠を掴むことを心がけており、再読の際はより細かな部分にも理解が行き届くようにしたいと思う。とりわけ、本書の中で提示されている具体例を実際に作曲ソフト上で再現をし、音を確認しながら対位法の理解を深めていく。対位法を理解していない状態で、複数のメロディーを同時に巧く響かせることは不可能に近いと改めて思う。

先人が理論を体系化してくれた恩恵を存分に享受したい。まずは既存の体系を学び、そこから自分なりの工夫や独自の理論が少しずつ生まれてくるようにしたい。

日本に一時帰国の最中は、もっぱら作曲実践だけに従事することになると思われるが、帰国までに、昨日届いたチャイコフスキーが執筆したハーモニーに関する書籍についても一読を完了することができたらと思う。一読目はとりあえずハーモニーの全体像を把握するように、あえて具体例を作曲ソフト上に再現することなく、概念的にハーモニーの持つ意味の感覚を一度身体に通しておく。そこから二読目にじっくりと具体例を作曲ソフト上に並べ、試行錯誤しながらハーモニーについての理解を深めていくという方法を採用したい。こうした方法を採用するのは、全体像を把握しないままに

最初から具体例やエクササイズを通じて学習しようとする、細部に入り込んでしまう危険性があり、あまりに時間がかかるためである。そうしたことを防ぐ目的と、さらには私自身が概念的な理解を好む傾向にあるということを活かして、初読時は文章の記述からハーモニーを理解していくようにする。チャイコフスキーが執筆した本書に関しては、今週末から来週の前半にかけて一読目を終えるようにする。

昨日改めて、いつか作曲に関しても学術機関で本格的に学びたいという思いが湧き上がっていた。作曲に関して、学術機関に所属することなく独学で偉大な作曲家になった人物は数多いが、そうであってとしても、大抵は師に付いて指導を受けている場合がほとんどである。やはりメンターのような存在からフィードバックを受けることは重要なのだろう。今すぐにといいわけではないが、それこそ人間発達と教育に関する博士号を取得した後に、どこかの大学で作曲を本格的に学びたいと思う。

仮に学士号から学ぶことになったとしても全く問題はない。修士号を三つ習得し、博士号を一つ習得した後に、学士課程に入学するとういのも悪くない、と近所のノーダープラントソン公園を歩きながら考えていた。可能であれば、その後に、作曲に関する博士号を取得したいと考えている。博士号を取得する過程の中で、あるいは取得後以降は、欧州の各国の文化に影響を受けた独自の作曲理論と作曲技術を学ぶために、欧州の学術機関を転々としながら生活を営みたい。普遍的な作曲理論と作曲技術のみならず、一つの国で固有に育まれてきた独自の作曲理論と作曲技術を学びたいのである。

今年の夏に訪れた、ノルウェーのベルゲン大学には、エドヴァルド・グリーグの音楽を研究する機関があり、そこは今でもとても魅力的な場所に映る。絶えず日記を書き、絶えず作曲を行う日々の実現に向けて、今日も昨日と同様の一日を送る。2017/12/13(水)06:39

No.543: Research Proposal

I had a meeting with my supervisor today about my research. Today's meeting was rather short because the progress of my research is going well. During winter holidays, I'll finalize my research proposal. In particular, what I need to do is to find out some articles about the variables I'll utilize. In addition, I have to think about the issue where my hypotheses were not validated.
18:37, Monday, 12/18/2017

1899. 父からのメール:「人生から何を問われているか？」

今日は午後の一つ嬉しい知らせを受けた。拙書『なぜ部下とうまくいかないのか』の増刷が決まったという連絡を担当の編集者の方から受けた。本書は今から一年半以上も前に出版されたものだが、現在でも新たな人に手に取ってもらえているようで嬉しく思う。偶然にも、今から二年前のこの時期に、私はこの書籍の原稿を書き上げた。

クリスマスに向かうまでの一週間の中で、何か降ってきたかのような感覚に身を委ねて、五日間で原稿を書き上げた日々の記憶がまざまざと蘇ってきた。それは創作活動における「憑依現象」と呼んでいいものだったのかもしれない。

あの五日間の中で、文章を書いている私は確かに私だったのだが、同時に、私が私ではないかのような感覚が絶えずつきまとっていた。先日、バッハの前奏曲第9番を聴いている中で自然と込み上げてくる感動と同じものを、当時の私は文章の執筆過程の中で感じていた。

『なぜ部下とうまくいかないのか』にせよ、『能力の成長』にせよ、今となっては全く読み返すことはないのだが、読み返す際には、何か当時の感動が再度喚起されるような感覚があるから不思議である。文章を執筆するという創作活動の本質には、そうした感動の喚起のようなものが潜んでいるのかもしれない。だから私は日々文章を綴り、日々を感動の中で生きようとしているのだろう。

言うまでもなく、こうした感動を生むのは、小さな自己では決してなく、自己を取り巻く他の存在者であり、自己を超えた存在によるものと言及しておかなければならない。私が日々行っているのは、自己の内面の記録では決してない。そうではなく、他者や自己を超えた存在と自分との交流から生まれる感動の記録なのである。私はこれを残りの90年間、人生の最後の日までやり続ける。それが他者と共にこの世界で生き続けることだと考えているからだ。

編集者の方からのメールの後、また別のメールが一通届いた。確認してみると、それは父からのメールだった。父から送られてきたメールの中に、実存主義的心理学者のヴィクトール・フランクルが残した、「人は人生から問われている」という言葉に対する父の考察が記されていた。フランクルが残したその言葉と共に、父の考察は非常に深いものであり、私の心を動かしたということを書き留めておきたい。

私たちはよく、人生に対して問いを投げかける。しかし、人生から問われていることが一体何かを考えたことはあるだろうか。私たちが人生に問いかけるのではなく、人生が私たちに対して問いかけていることに耳を傾けてみるのである。その時、様々な声が聞こえてくるかもしれないが、本質的には、父の言うように、人間の尊厳に関する問いかけがなされるに違いないと私も思う。

「人が人であるゆえん、人としての存在の根源は、尊厳にある」という父の言葉は、私がこれまで日記で書き留めてきた言葉と共鳴している。父は、人としての尊厳を「人として生きることの意味」あるいは「人として守りぬかなければならないこと」だと定義していた。

欧州での生活を始めて以降、私は世俗的なものを求めなくなった。ただし、求めていることがあるとすれば、それは徹頭徹尾、人生からの問いに絶えず耳を傾け、人間として生きることの深層的な意味に立脚する形で、人間も自然も人工物も含めた他の存在者との交流から生まれる感動の中で日々を大切に生きることだけだ。

私は多くのことを望まない。ただそれだけを望みながら、明日も今日と同じように生きる。2017/12/13 (水) 20:05

No.544: The End of the Classes

Finally, every class this year was over. I'll go back to Japan tomorrow morning. Before leaving, I'll complete the assignment for the systematic review course.

Since I had a class of the course today, my memory is still clear about the topic that requires for the assignment. Because I already have some ideas about each question in the assignment, it will take just one hour to complete it. After finishing it, I'll do a final check about my baggage. 17:03, Tuesday, 12/19/2017

1900. 変容と命を象徴する夢

昨夜は久しぶりに印象に残る夢を見たように思う。それは、人間の赤ちゃんが成長していく過程を描いた夢だった。どういうわけか、その赤ちゃんは豆粒のような大きさであり、ある瞬間から同じ大き

さの犬に変わった。小さな犬に変化した赤ちゃんは、畳の上で歩行運動の訓練をしており、私はその様子をじっと見守っていた。

誰からも強制されることなしに、犬となったその赤ちゃんは何度もこけながら起き上がることを繰り返し、懸命に歩く練習をしていた。しばらく様子を見た後に、一瞬目を離すと、その赤ちゃんが今度は、干しサバに変化していた。どうやら近くに置いてあった、自分の体の数倍以上の大きさの干しサバを食べたらそれになったようだ。

部屋の近くに台所があり、私はその赤ちゃんの父親と話をした。

私:「あの～、赤ちゃんが干しサバになってしまったのですが」

赤ちゃんの父:「えっ、本当ですか？それは大変だ」

私:「おそらく、犬になった赤ちゃんが干しサバを食べてしまったのでその姿になってしまったんだと思います」

赤ちゃんの父:「おそらくそうでしょうね。すいませんが、その干しサバをこちらに持ってきていただけますか？」

私:「はい、ですがまだ乾燥していないので気をつけて下さい」

私はそのように述べながら、濡れた干しサバをその父親に渡した。

赤ちゃんの父:「それではフライパンで焼いて元の姿に戻しましょう」

赤ちゃんの父はそのように述べて、まずはサバから犬の姿に戻すために、そのサバをフライパンの上に置いた。「干しサバから焼きサバに変容する瞬間に、元の犬の姿に戻るのだろうか？」と私は不思議に思ったが、確かにそれが一番全うな手段だと思った。

フライパンの上に置かれた干しサバは、犬が変化したものであるから、当然ながら命を持っており、それはフライパンの上で小刻みに動いていた。私たちはその様子を黙ってしばらく見守っていた

が、私は少々フライパンの温度が高すぎるのではないかと思った。実際に、激しい炎がフライパンに当てられていた。干しサバは一気に焼きサバになり、私はそれが焦げてしまわないかだけが心配だった。

赤ちゃんの父親が、フライパンにサバの煮付けの素を入れ、今度はフライパンがグツグツと音を立て始めた。焼きサバの様子を確認すると、まだ命があるようであり、背びれをピクンとかすかに動かした。

焼きサバがいよいよサバの煮付けに変化する瞬間、犬の命が蘇った。しかし夢の中の私は、犬の命を精神空間において確認することができたのだが、物理空間において確認することができなかった。結局私は、肉体を持ったその犬の姿を確認しないまま、次の夢に移っていった。

その次に見た夢も印象的であり、一人の人間が小さなてんとう虫に変化するものだった。見知らぬ女性がてんとう虫に変化し、その場にいた人たちはそれに気づかず、飛び回るてんとう虫を邪魔な存在だとみなしていた。その場にいた人の何人かは、それがてんとう虫だと気づかず、羽アリかハエのような生き物だと思っているようであり、それを叩き落そうとしていた。

私は、その虫がてんとう虫であること、そしてそれが一人の人間が変化したものであることを黙っていた。しかし、私はその虫の命を守るために、周りにいた人たちがその虫を叩き落そうとすることをさりげなく妨害していた。

てんとう虫が窓の外に飛び出して行った時、一通のテキストメッセージが携帯に届いた。確認すると、そのてんとう虫からだった。厳密には、てんとう虫となった女性からのお礼のメッセージが届いたのである。テキストメッセージのアイコンはてんとう虫の姿をしており、少しばかり微笑ましいものがあった。

私はてんとう虫となった女性からのメッセージを読みながら、「てんとう虫の命と人間の命は全く変わらない重みを持つのだ」と心の中でつぶやいていた。2017/12/14(木)06:08

No.545: “Fundamentals of musical composition (1967)”

I got up at 4:30 in the morning, I started today's activities from 5:00. The first thing I did was to begin to read “Fundamentals of musical composition (1967)” written by Arnold Schoenberg.

Whenever I read a book for the first time, I take a look at the entire pages without delving into details. It is helpful to capture the overview of the book. Although Schoenberg points out that this book is fundamental, it contains ample examples and theoretical notions.

Since the aim of the book is to provide undergraduates with sufficient knowledge of musical composition, it covers essential topics of composition in a comprehensive way. This book would be very beneficial like me who is self-taught. 17:11, Tuesday, 12/19/2017